

「紀南作教の体育教師」佐々木賢太郎

—紀南作教への参加—

Kentaro Sasaki : Physical education teacher belonged to Kinan-Sakkyou

—His joining in Kinan-Sakkyou—

石田 智 巳

Tomomi ISHIDA

2004年10月7日受理

Abstract

Kentaro Sasaki, the author of “Taiiku-no-ko” had made many famous P.E. practices as a teacher of junior high school and high school at Kinan district since the end of the World War2. The features of his practices are : 1) using compositions as educational method, 2) combining with educational guidance, 3) starting from reality of children’s bodies and minds, and so on. This study attempts to clarify the process of his joining in Kinan-Sakkyou and the way to use compositions to practices analyzing his articles and “Kinan Kyoiku” which were bulletins of Kinan-Sakkyou.

1. はじめに

佐々木賢太郎といえば、体育授業で生活綴方を教育方法として用いて行った実践集である『体育の子』¹⁾の著者として知られている。この『体育の子』については、すでに小林篤や中森孜郎がコメントしている。小林²⁾は、『体育の子』時代の実践の特徴を次の3つにまとめている。①体育は、子どもの生活に根ざしたものでなければならない(生活体育)、②身体の現実から出発するのでなければならない(生命を大切に作る体育)、③身体の小さい劣等感の強い子どもに自信を持たせるには、その子の問題を集団全体の問題にしなければならない(励まし合う体育)。小林はまた、佐々木の授業を「保健体育教育と作文教育と同和教育とが三位一体となったもの」だという読みとりをしている。また、中森³⁾は、『体育の子』とそれ以降の佐々木の実践を捉えて次の6つにまとめている。①人間の生命の尊重を基本理念に据えた実践である。②「からだづくり」をめざす体育である。③からだと心の統一をめざす体育である。④学級の中で、最も体の弱い子や体力や運動能力の劣る子などを中心にして、実践が展開されている。⑤ゆとりとか安らぎの雰囲気のうちにもっている。⑥実践の背後には、仲間による励ましや支えなどの交流がある。

佐々木はまた、『体育の子』と同様に、内海⁴⁾p.190や出原⁵⁾p.429によれば、体育界における実践論争としては戦後初とも云われる瀬畑四郎との論争(所謂、佐々木—瀬畑論争)の当事者としても知られている。この論争自体は、他にも荒木豊⁶⁾、岩田靖⁷⁾によって取り上げられており、ここでは論争に立ち入るつもりはない。

この論争の直接の契機となった授業報告「バスケッ

トボール(中学1年)ードリブル学習—」⁸⁾には、「私たちのサークルでは、」とあるが、この「サークル」が紀南作文教育研究会であることは、後の瀬畑⁹⁾による論文からも読みとることができる¹¹⁾。佐々木はこの論争の始まった年である1960年の3月には「現場は体育教育をこう考えている」¹⁰⁾という論文を著しているが、そこには当時勤めていた南部中学校の名はなく、代わりに紀南作文教育研究会の所属という書き方をしている。また、本文にも「われわれのサークルで」、「私たちのサークルでは」とあり、中森も述べているように、佐々木と紀南作教の結びつきは強いことが伺える。

ところで、佐々木を題材とした体育関係の論文において、佐々木と紀南作文教育研究会(以下、紀南作教)に入会するあたりは、すでに岩田や野田耕他によって取り上げられている。岩田⁷⁾は、佐々木自身が晩年の1991年に行った講演の記録¹¹⁾を中心として、紀南作教との出会いについて述べており、一方、野田¹²⁾は、「佐々木が生活綴方的教育方法を用いて体育教育を行うようになるまでの経過や背景について記された研究及び文献は皆無」であることを問題意識とし、そこから紀南作教の機関紙である『紀南教育』を中心に、佐々木の生涯を描き出している。佐々木自身も自らの教師生活を振り返る中で、紀南作教との出会いについては何度も述べている。

一般に、サークルの動きは個々の会員によって作られ、また個々の会員の実践はサークルの動向に沿いつつ行われるものであり、全国規模の組織に比べれば、紀南作教という和歌山県の紀南という地方の組織では、このような関係がより密に行われていたと考えられる。さらに、佐々木自身は、「1人の教師が独走する

のではなくて、自分のやった実践を仲間に提起して、さらに発展するために批判しあう」^{13)P.44}ことが重要だと述べているが、そのように実践してきた仲間の集団が紀南作教なのである。

しかしながら、この紀南作教というサークルの性格や起こり、紀南作教が佐々木に与えた影響、逆に佐々木が紀南作教に与えた影響などを題材として取り上げた研究は皆無とっていいだろう。筆者は、『体育の子』という実践や、瀬畑との論争となった実践はどのように生み出されたのかを考えると、そのときどきに紀南作教がサークルとしてどのような動向を見せていたのかを探ることは不可欠の条件だと考える。

そこで、佐々木の実践の特徴と移り変わりを紀南作教の研究動向や出来事から実証的に読みとる試みを行う。本研究ではその一環として、まず紀南作教というサークルに大きく焦点を当てながら、1. 紀南作教というサークルが結成されるまでの会内外の動き、2. 佐々木が紀南作教に入会する経緯、3. 紀南作教のメンバーや佐々木の生活綴方への道はどのようなものであったか、の3点を描き出していくことを目的としている。

資料は、紀南作教の機関紙である『紀南教育』や当時のガリ版刷りの出版物、佐々木を始めとする会員の回顧、あるいは紀南作教についての論文などをもとにした。

2. 紀南作教の結成前夜一会の内外一

2. 1 新教育と子どもの基礎学力低下

わが国における民間教育研究運動は、教育が権力によって強く規制される歴史と現実をもったところから生じており、明治期にすでにその萌芽が見られる。戦後の民間教育研究運動は、次の3つを特徴にもっているといつてよいだろう。それは、戦前に弾圧された民間教育運動や芸術、文学の継承や復興を目指して、また、戦後民主改革から締め付けに向かう「逆コース」とよばれる1950年前後の政府・保守党の文教政策に反発して、あるいは、アメリカから輸入された「新教育」への批判として、の3つである。

紀南作教もまたこのような戦後の民間教育研究運動に位置づくため、上に述べた何らかの契機をもっていると言えるだろう。

紀南作教は、1952年5月10日に正式に発足するが、紀南作教の原型はその前年の1951年10月7日に藤田五与と真鍋清兵衛を中心として結成される¹⁴⁾。サークル結成から1年後に真鍋は、サークルを結成した理由を次のように述べている^{14)P.12}。

「会の結成そのものには、ぼくやフジタのあらゆる意味での心理的な動きがまじっていた。しかし、それよりも以上に、ぼく達仮免教師をして、困難な仕事の口火を敢えてつけさせたのは、日本の教育情勢の、ほ

ておくことのできない変化と、日本民族のための教育の研究に、じっとしておれないものを感じたからである」。

サークルを結成する引き金となったともいえる当時の「日本の教育情勢のほっておくことのできない変化」を、当時のわが国の一般的な教育情勢として引き取ってみるならば、1つは教育の反動化と中央集権の強化による教師の拘束、1つはアメリカから輸入された「新教育」によって引き起こされたとされる学力低下の問題である。教育の反動化や逆コースの起こりが、朝鮮戦争を契機とするアメリカによるわが国の東西冷戦構造の極東防波堤政策を契機とするのであるならば、学力低下を単純に新教育とその具体的方法である問題解決学習に求めるという図式は、アメリカに追随する政府保守党の反共政策への抵抗と取れなくもない。

藤田は、1951年に雑誌『教師の友』に自ら行った白浜の小・中学校での読み書き能力調査について報告している¹⁵⁾。読みに関して言えば、小学生新聞の一文を読ませ、読めるかどうかを調べる簡単なものであるが、「建造」「日時」が読めなかった中学3年生は93人中、それぞれ33人、52人であり、書きに関しては「読めないものが書けないのはあたりまえである」といい、基礎学力の低さを嘆いている。しかもこれは、「カリキュラムとか、ガイダンスとか、コアとか何とか頭をなやます横文字をはらいのけて、最も無難な書き取り・習字・そろばんに一生懸命な教師の学級も、新教育に夢中になっていた教師の学級も、どちらにも等しく学力低下がおきていた」^{15)P.23}のであった。

それほど戦争によって奪い取られた子どもの学習時間は大きかったと言えるのであり、一概に基礎学力の低下を新教育の責任に帰するわけにはいかないが、さりとて、新教育がすばらしいものとは捉えられていなかった。いずれにせよ、新教育の方法では学力向上は望めず、また、旧来の方法でも学力向上は望めなかったわけである。藤田も、「紀南作教も基礎学力の向上をめざして起こってきたものである」^{16)P.20}というように、問題は学力低下であり、これを打開するためには、新しい教育方法の模索が必要なのであった。

2. 2 『教師の友』紀南グループの結成

こうした教育の反動化や子どもの学力低下を目の当たりにして、1951年の9月16日に真鍋と藤田は、紀南の地にとどまらず、和歌山全県下の民間教育研究運動を組織しようとよびかける。このよびかけは、「県下の民教協同志諸君、ならびに教師の友読者諸君」と始まっている¹⁷⁾。ここにある民教協というのは、日本民主主義教育協会のことである。民教協は、1946年に民主主義教育研究会(民教)として戦後いち早く結成された民間の教育研究団体であるが、翌1947年に民教協に名称を変更する。また、『教師の友』については後にも触れ

るが、1950年12月に日本学力向上研究会より創刊された雑誌である。なお、雑誌のタイトルでもある教師の友とは、「真理」と「子ども」のことである^{19)p.1}。

終戦の年である1945年の12月に白浜国民学校の助教論となった藤田は、当時、「教育というものを、単に子どもに本を読ませたり計算させたり、などというぐらいにしか考えて」おらず、教育よりも政治活動に興味があったという^{19)p.109}。藤田は、その2年後の1947年に「民教」が刊行する雑誌『明かるい学校』第3号の普忠道の「リアリストの目」という文章に出会う。

「リアルにもものを見る目は、できあいの観念にとらわれずに、つまり主観的ではなく客観的に対象に接することによってのみ、すどく磨きすまされていく。しかも観照によってではなく、対象への実践的な働きかけによってのみ、それを確かにすることができる。誠実な教師たちは、良心の名において、自分の教育対象である児童や青年の問題と取り組み、彼らの幸福のために、救いの道を実践的にもとめたのである。(略)我々の貧しい民主主義的教育の系譜は、尊敬すべき先輩たちの、リアリストとしての目に貫かれた勇気のある実践によって築かれてきた。(略)政治的・経済的な解決に待たねばならぬことも実に多いけれど、この偉大な民主革命を主体的につかむことといえば、まず、我々が先覚者にならって、勇気のあるリアリストになることである。教育の民主化を事大主義的に、文部省をはじめとするいろいろな権威に追随しながら成し遂げようとする奴隷根性を清算することである。」^{20)p.2}

藤田はこの文章によって「教師としての激動の社会に生きていく道のあることを」教えられたという^{19)p.109}。これに感動し、支部結成を思い立った藤田は、『明かるい学校』の発行団体である民教へ問い合わせたところ、民教は民教協に発展的に解消し、『明かるい学校』も『あかるい教育』に名称を変更したとのことであった²³⁾。そこで、1948年6月に真鍋やその他の若い教師と6名で民教協白浜支部を結成する。しかしながら、民教協自体が1949年12月に占領軍の圧力²⁴⁾によって会自体が消滅することになった。

その後、藤田と真鍋は、『明かるい学校』、『あかるい教育』を継承するような形で1950年12月に「日本学力向上研究会」によって刊行された雑誌『教師の友』の紀南支部を作るべく、先およびかけを行うことになる。最初、『教師の友』編集部からは教育科学研究会(教科研)に加入してはどうかとすすめられた。というのも『教師の友』に支部はなかったからである。しかし、「教科研はなじみもうすく、よく知ってもいないので」^{19)p.119}、また、「かつての民教協会員の中に、『教師の友』読者としてなお連絡の取れていた人もいたし、教組総会で『教師の友』を読んでいる人を見かけたりした」^{19)p.118}ことから、やはり『教師の友』の会として出発しようということになった。

このよびかけは、和歌山全县に呼びかけたものであったが、紀南の佐藤昭三、河合功一の2人だけが応えており、発足は4名であった。これが紀南作教の前身、『教師の友』紀南グループであった。第一回の会合は、江住小学校で行われた。1951年10月7日のことである。

3. 『教師の友』紀南グループへの参加

このようにして結成された『教師の友』紀南グループのよびかけに佐々木は直接応えてはいない。ここでは、佐々木と真鍋、藤田両氏との出会いを中心として、佐々木をして紀南作教へ入会させるに至る経緯を描き出していく。

佐々木と真鍋、藤田両氏との最初の出会いは、佐々木が1946年の7月に捕虜生活をおくっていたレンパン島より復員した後のことであり、その年の12月1日に教師になる前のことであった。当時、白浜の地にあった「白幸(しらゆき)会」という文芸サークル・民主サークルに佐々木は参加している。このサークルに真鍋、藤田両氏は属していたものの、「白幸会」自体が解散寸前のサークルであったため、佐々木は2回参加して解散となった²¹⁾。その時点で佐々木は真鍋、藤田両氏と知り合ったことになるが、その後、佐々木が真鍋、藤田両氏と運命的な出会いを果たすまでには、さらに数年の歳月が必要であった。

1946年の12月に母校である田辺商業学校に勤務した佐々木は、1948年の3月いっばいで退職する。その後、実家の都合もあって商売を志そうとするが、結局、同年5月より白浜中学校へと勤務することになる²²⁾。この年には、バレー部を作り紀南4校でのリーグ戦を開催するなどクラブ活動に力を入れ始める。この練習のため、「夜おそくまで、男女の生徒をのこして猛練習をして、夏休みは毎日と全くのところ無我夢中にて唯一途に上手にしてやりたいと」²¹⁾いう思いで、子どもたちを鍛えつづけたという。1950年には町民バレー大会を開くなど地域のスポーツを組織している。一方、体育の授業では、かなり高いレベルでの技術を身につけさせていた。例えば、教科のみならず業間での練習や放課後での努力によって、鉄管を使った鉄棒でありながらも、「中3では、鉄棒は『蹴上がり一巴あしかけ。』をほとんど行え」、また幅跳びでは、「女子の3年生にて平均、3米60」であった²¹⁾。

同時に、「当時の白浜中学校の校長が西牟婁郡体育連盟の会長だったこともあって、49年段階から学校が体育の実験学校」^{23)p.14}になる。そのため、「①こどもの個人差の研究(S24~26) 体力測定、調査、②事例研究、③指導法の研究、④クラブ運営についての実践」^{24)p.690}を行うことになった。このようにして佐々木は、授業、研究、クラブ、地域スポーツと精力的に取り組んでいたのである。

1951年に行われた研究発表で佐々木は、「豊かな体力はどうあるべきか」ということについての調査、測定の結果、「個人差がある」と報告した。すると、真鍋、藤田両氏から、「そこからが大事と違うか。なぜそういう低い体力の子ができていいのかということを考える必要があるんじゃないか」²⁵⁾p.26。「佐々木君、君のよくやるのはわかっているけど、個人差にしても、なんのために個人差が大切か、なぜ個人差が生まれるのか、体力がなぜ必要かといったところの子どもの体育教育をうけた姿が、技術と体力一点ばりで、どうもおかしい」²⁴⁾p.690。また、「地域の生活を見つめる中で、体育の現実を明らかにし、体育をみていかぬと、現象面の個人差があるとしても、『なぜ個人差の矛盾があるのか』と、『もっと、自己の生活をとおして子ども自身が、自分の体が差がある事実をつかまさない、たんなる研究になって研究にはならない』というするどい、教育として個人差研究をふかめ生命を与えよ」²¹⁾と警告された。

佐々木は、1954年に『「体育ノート」と「家庭訪問ノート」』で、日本作文の会の第3回小砂丘賞をうけるが、その後、『作文と教育』1955年3月号の自画像のなかにこのときのことを次のように書いている。

「真鍋清兵衛、藤田五与氏（白小当時）と交る中に先進的な、生活綴方を学ぶ。体育の技術主義、機械主義を痛烈に批判を受く。当時、全国体育優良校の表彰問題がおこり、両氏の批判から学び辞退」²⁶⁾pp.71-72。

小学校に勤務していた真鍋と藤田は、1947～8年頃、雑誌『あかるい教育』から社会科カリキュラム編成について学び、「白浜町における社会科カリキュラム試案」をつくっている。この試案の趣旨は、「児童を心から愛し、教育者としての責任において民主主義を強力に押し進めなければならない」、「全町民の要望と支持の上に立ってこそ白浜プランができ、社会科の実践は強固なものとなる」²⁷⁾p.259とするものであった。また、真鍋は1949年の4月から白浜小学校の体育の係を命じられて、遊びとスポーツを中心とした体育のカリキュラムも作成している²⁸⁾。このような彼らからすれば、地域や生活と遊離した技術中心の体育のみでは、「子どものねがいに立たず、むしろ体をむしばむことになりかねない」²¹⁾と佐々木に反省させるのであった。佐々木自身も年下の2人から鋭い指摘を受けるものの、「方向なき生活体育、生活教育を学んでいたこともあって、彼等の批判には、抵抗も感ぜず素直に学べた」²¹⁾、「仮りに、真鍋・藤田両君の批判にまなばずすすめていたら、1951年の田辺西牟婁中体連の会長をつげつつ、技術主義を謳歌し、選手制度を強化し、体育ぎらいの子どもをおおつつくっていたらどうとも思う次第である」²¹⁾といい、彼等のことを恩師ともいっている。

真鍋は、1951年に、白浜小学校から江住小学校へと転任するのであるが、真鍋が白浜小学校で3年間受け

持った子どもが佐々木のいる白浜中学校へ入学してくるようになった。この子どもたちこそが、白浜中学校時代（1954年3月まで）の『体育の子』の主人公なのであった。真鍋と佐々木は子どものことや教育のことについて、白良浜で話をしている。佐々木はそのとき、ものの認識としてカントやヒュームの唱えた不可知論を語り、それに対して真鍋から教育の可能性を訴えられ、批判を受けている²¹⁾。

このようにして真鍋、藤田両氏と出会うことによって、佐々木は、それまでの技術主義、鍛錬主義の体育から方向を転換するきっかけを与えられるだけではなく、子どもの見方や考え方、そして、「この子どもたちをどのようにしたらいいのか」という考え方、について影響を受けたのであった。このことが、後に『体育の子』に「生活体育をめざして」という副題をつけさせるようになったといってもよい。

そのため、『教師の友』紀南グループ結成のよびかけに対して、佐々木は、「何か体育大会で、江住の結成大会へは不参加であったが、入会の意志があったことはたしかだ」²¹⁾といっている。そして、10月28日に入会することになった。

この出合いを佐々木は、次のように総括している。

「それにしても、体育教師が、技術指導を中心にしてきたものが、体育と作文の統合が、生活に体育、体育に魂を統一さしていく仕事の価値を学び得たことは、サークルづくりとサークルの出発によって得られた宝物だ。」²¹⁾

4. 紀南作教の結成と教育方法としての生活綴方

4. 1 藤田、真鍋と生活綴方の出合い

藤田、真鍋が「よびかけ」をおこなった1951年というのは、「作文（つづり方）復興の年だったといっている」²⁹⁾pp.250-251年である。この年には、さがわみちお編『大関松三郎詩集 山芋』（2月）、国分一太郎『新しい綴方教室』（2月）、無着成恭『山びこ学校』（3月）、鈴木道太『親と教師への子どもの抵抗』（4月）や長田新編『原爆の子』（10月）、今井誉次郎『帰らぬ教え子』（10月）などが発行されている。そして、先に紹介した藤田、真鍋の行ったよびかけには、次のような件がある。

「すでに、国分、鈴木、無着等諸氏により、平和と人民文化向上のために闘い、今なお闘いつつある北方教育の実相が発表された。これをそのまま見送ってもいいものであろうか。平和を守り人民文化を向上せしめる、和歌山県民主教育の確立のために、諸君に呼びかける。」¹⁷⁾p.62

このように、1951年の時点で、すでに方法としての「生活綴方」がかなり意識されていたのである。それは、「北方教育の継承」³⁰⁾という意味においてである。ちなみに、「北方性」³⁵⁾に対する和歌山県の地域性につ

いては、1952年3月の『紀南教育2号』から意識しはじめられている³¹⁾。

さて、藤田、真鍋と生活綴方との出会いは次のようである。1947年の9月から始まった社会科では、教科書もなく、日本の教育で全く経験のないこの教科を取り扱うすべも知らなかったため、「民主的児童雑誌『子どもの広場』をよりどころとして、この雑誌を通じて生活綴方や自治会の持ち方を学んだ」^{27)p.258}という。また藤田は「“教育新報”というパンフレットみたいな雑誌で国分先生の綴方復興を読み」といっている³⁰⁾。そして、「社会科の調査のまとめや報告という形で作文を書かせたり、日記なども書かせたが、生活との結合というところまでは考えが及ばなかった」^{19)p.111}といっている。このとき藤田は、1950年7月に発足した「日本綴方の会」(1951年9月1日に「日本作文の会」と改称)の和歌山県で唯一の会員であったが、『作文の会』を作るには、まだ生活綴方というものがわかっていなかった^{19)p.118}ともいっている。このことは、藤田自身が当時『教師の友』1951年9月号に掲載した、次のような国語の実践報告の一節からもうかがい知ることができる。

「私のしたことわ、とにかく教科書を読むとゆうことお中心にしていた。だから読むのわ大へんじょうずになる。だが書くほうがおいつかない。もちろん写し書きおどんどんさせたのだから、字わかなりうまい。それに文もわりにととのったものお作る。問題わ、目標の第3とした言語表現の点だ。つづり方の項おくわしく書けなかつたのわ、実わ書けなかつたのだ。」^{32)p.18#7}

つまり、藤田自身は当時刊行されていた雑誌や出版されていた書物から生活綴方については知っていたものの、自らの教育実践で使うまでの方法論を獲得していなかったといえる。

なお、よびかけに最初に応えた川合は、矢川徳光の『新教育の批判』が生活綴方との出会いとなったという。型にはまった新教育に飽きたらなくなった川合は、この書を読んで矢川に手紙を書く。そして、その返事で『教師の友』を知り、創刊号からの読者になり、そして、無着の『山びこ学校』、国分一太郎、今井誉次郎を知り、だんだんと生活綴方的教育方法をつかんでいったという³³⁾。

4. 2 紀南作教の結成と生活綴方

したがって、1951年10月の『教師の友』紀南グループ結成時の「きまり」にはすでに「生活綴方運動を推進する」³⁴⁾とあるものの、実際にはどうしていいのかわからない状態であったといえよう。『教師の友』紀南グループが生活綴方を明確に意識するようになるには、教育科学研究会全国連絡協議会第1回大会まで待たねばならなかった。この大会は、1952年3月に熱海で開

かれ、真鍋、藤田、佐々木の3名が参加した。藤田によれば、「難しい話をされる先生方に交じって、子どもの話をし、先生一般の話をしていたのが、恵那の近藤武典氏だった。私たちは、近藤氏の発想と教育運動の話にひかれた。私たちがやるなら、これだなと思った」^{19)p.120}という。また、「石田和男さんもおられて、『綴方をやんなさい』といい、岡田稔さんも部屋に来てくれて、『教科研もいいけど、綴方から手をつけなさいよ』とものすごく綴方の宣伝を受けた」^{35)p.81}ともいっている。恵那(岐阜県中津川辺り)では、1950年9月に「恵那綴方の会」が組織されていて、近藤や石田はその会の中心となった人物であり、岡田は当時の『教師の友』の編集兼発行人である。また、恵那では日本作文の会の第一回作文教育全国協議会が1952年8月に開催されているため、3月に行われた教科研の大会では組織拡大の意味もあったと思われる^{36)p.116}。いずれにせよ、このようにして熱海では、綴方の影響を受け、また日本作文の会の今井誉次郎や国分一太郎といった生活綴方の「大御所」に和歌山に来てもらう約束をしたのであった。そして、4月には、「生活綴方教育運動を紀南の地に起そう」とよびかけを行っている³⁷⁾。

さて、『教師の友』紀南グループは、5月10日に今井を迎えて「社会科研究会」を教組西牟婁地方支部文化部主催という形で開催している。そこで、今井は実際に研究授業を行っているが、そのときの授業の様子は、『紀南教育第4号』³⁸⁾や、真鍋の「解放教育の基盤と内容」³⁹⁾に見ることができる。ここでは、後者をもとにして、簡単に紹介する。

今井は、まず子どもたちに家の仕事を尋ね、またどんな仕事があるのかを聞き出していく。そして、子どもから出された市長や社長、大工、八百屋などの仕事のうち、どれが一番立派な仕事かたずねる。そして、子どもたちから「仕事にりっぱなもの、劣ったものはなく、みんな平等である」という答えを引き出す。その後、「よく似ているようでちょっと違う」質問として、日本人とアメリカ人、朝鮮人を比べてどこの国の人が一番えらいと思うかたずねる。そして、アメリカ人が一番えらくて、朝鮮人が一番えらくないという答えを子どもたちから引き出すことになる。

この授業の内容は、結局のところ新教育が押し進めてきた教育が、「ポカシ的観念教育」^{39)p.4}であったことをあらわしており、それは「現実をまともに見つめていない」、「リアリストの目ではない」というところに行き着く。このような事実を目の当たりにして、恵那の綴方の会から勧められた生活綴方の道を進むことをさらに強くし、研究会終了後に『教師の友』紀南グループは、「紀南作文教育研究会」として新しく発足することになった。なお、『紀南教育4号』には、研究会において今井に、生活綴方的教育方法ないし、作文教育の方法についての指導と質疑がなされており、その様子

が示されている³⁸⁾pp.14-17。

4. 3 佐々木の生活綴方への道

これまでの考察から、それまで技術主義、鍛錬主義の体育を行っていた佐々木が生活綴方に取り組み始めるのは紀南作教に入会する52年の3月の教育科学研究会の全国大会への参加後からだとして結論づけることができる。しかしながら、次のような佐々木の言もあることは見逃せない。

「私が白浜中学校へ赴任したのが昭和23年(1948年)ですから、その時分から子どもの生活や遊びなどの記録をしていました。当時私の教え子の西勝君が3年生のときのフォークダンスの作文が今でもあるのです。ですから昭和23年ごろから、体育の授業のなかで書かせていく活動に入っていたわけです。だから西勝君から『ぼくも書くのが大変だが、先生も書くのが大変だよ』と言われていたのです。」¹³⁾p.24

体育で記録することが大切で研究になるということは、佐々木の出身校である日本体育専門学校(現日本体育大学)の教員であった森脇正夫から、「社会へ出たら、どうしても社会の目というのは厳しいから、君ら実力をつけて、本の1冊や2冊ぐらいを教師やってる間に作れよ」と言われたことが心に残っていたこともまた事実であったという¹³⁾p.21。それが、体育の授業で書かせることにつながっていたのであろう。ただし、当時の書かせる仕事について佐々木は次のように回顧している。「無目的の作文をかかし、むしろ生徒が自主的に新聞をつくり、3C文集(編集ふじたとしろう⇒かずよ氏の弟)などをつくって、要求をだしていたが、担任は、この頃は、技術に熱を入れて、魂への触れは、全く黙視の状況であった²¹⁾。いずれにせよ、生活綴方とは言えないまでも、書かせる体育実践を1948年から行っていたことがわかる。

また復員した1946年の12月1日より勤め始めた田辺商業学校では、陸上競技部の顧問をしていたが、文芸部がなかったため、子どもたちと『暁鐘(ぎょうしょう)』という文集を作ったという⁴⁰⁾pp.88-89。このように、佐々木自身は紀南作教に入会する以前より、子どもに書かせ、また、自らも書くという活動を行っていたのである。これらは、まだ生活綴方とはいえないまでも、これらの経験が後の『体育の子』の実践のように、子どもにも綴らせ、自ら実践を綴るスタイルを確立していく契機となっているといっていいただろう。その意味で、野田がこの時期を「生活綴方黎明期」としているのには妥当性があるといえる⁴¹⁾。

5. おわりに

本稿では、和歌山県白浜町を中心とする紀南地方に組織された紀南作教の起こり、そして、佐々木が紀南作教に入会する経緯、そして紀南作教のメンバーや

佐々木と生活綴方の出会いについて明らかにしてきた。本研究のテーマである「紀南作教の体育教師」というのは、佐々木が紀南作教に入会して20年後に当時のことを回想して書いた文章のタイトルである²¹⁾。ここに、佐々木が常にサークルの一員として活動してきたことがわかる。

ところで本研究では、意図的に避けてきたのであるが、生活綴方ないし生活綴方的教育方法そのものの規定をしていない。それは、紀南作教について研究報告を行った河原尚武⁴²⁾も述べるように非常に困難な仕事であるといつてよい。では、綴方復興においてはどのように規定されていたかということ、本文にも紹介した1952年の中津川で行われた第1回作文教育全国協議会において、「生活綴方を、銘々勝手に解釈していて、各自が勝手にいいたいことをいうというふうであった」²⁹⁾p.258というように、明確な規定は難しいとされている。従って、本研究の当面の課題は紀南作教のメンバー、あるいは佐々木にとって生活綴方ないし、生活綴方的教育方法はどのようなものとして捉えられたかを明らかにすることである。

最後になぜ「生活綴方なのか」を述べることで本稿を閉じたい。

今井は、生活綴方の復興は、国語科の中の作文として復興したのではなく、アメリカから輸入された経験主義的な新教育に抗議するものとして復活したのであるという。すなわち、「アメリカ流の経験主義にもとづく生活教育ではだめで、日本の教師たちが、かつての自由のない絶対主義下で弾圧にもめげず行って来たところの苦難を経てつくり上げた方法でなくてはならないことになったのである」²⁹⁾p.252という。つまり、生活綴方という教育方法は、日本で生まれ発展してきた日本民族に固有の教育法なのである。それと同様に、佐々木や紀南作教のメンバーがこの時期に積極的に取り入れた版画もまた日本生まれの芸術教育であったために、取り入れられるようになったと考えられる。

＝注＝

注1：内海は佐々木を教育科学研究会の代表としているが、むしろこの実践論争の文脈では教育科学研究会ではなく、紀南作教と捉える方が自然であろう。

注2：藤田や真鍋は、それぞれ、「藤田五与」「藤田五與」「ふじたかずよ」「ふじたごよ」「ふじた・かずよ」と、また真鍋は「真鍋清兵衛」「まなべせいべい」「まなべ・せいべい」「まなべせいべい」という名前を使うことがある。文献には、そのときどきの名前を載せている。

注3：「民教」は、「民教協」へ「民教協」が消滅した後、民教協再建を願う人々によって、「教師の友」の会ができる。それ従って、雑誌も『明かるい学校』から『あかるい教育』へ、そして、『教師の友』(日本学力向上研究会)へと変わっていく。

注4：これは所謂レッドパージの影響であるが、これについては『教師の友』1956年2月号の座談会に詳しい。

注5：国分によれば、東北を中心とする新潟、北海道を含めた地域性を指すという⁴³⁾。

注6：国分一太郎の「綴方の復興と前進のために」は『教育新報』の1949年の8月から、11回の連載である。

注7：紀南作教のメンバーは、当時このような文体をよく使っているが、これは高倉テル（タカクラ・テル）が用いていた文体を真似ていたという（真鍋氏への聞き取り）。

＝引用文献＝

- 1) 佐々木賢太郎『体育の子 生活体育をめざして』、新評論社、1956、また、『新版 体育の子 生活体育をめざして』、新評論、1971
- 2) 小林篤『体育の授業分析』、大修館書店、1983、p.254
- 3) 中森孜郎「発刊に寄せて」、佐々木賢太郎『子どもたちの全面発達と体育』地歴社、1982、pp.3-9
- 4) 内海和雄『体育科の学力と目標』、青木教育叢書、1984
- 5) 出原泰明『教育実践事典第2巻 教科指導Ⅰ』、労働旬報社、1982、pp.427-429
- 6) 荒木豊「佐々木・瀬畑の実践論争（1960-1961年）」、宇土正彦監修『学校体育授業事典』、大修館書店、1995、所収、pp.630-633
- 7) 岩田靖「紀南実践の特徴」、中村敏雄編『戦後体育実践論』第1巻、創文企画、1997、所収pp.141-153
- 8) 佐々木賢太郎「バスケットボール（中学1年）－ドリブル学習－」、『体育の科学』、1960年8月号、pp.427-430
- 9) 瀬畑四郎「佐々木氏の反批判に考える－バスケットボールと体育の本質の関連で－」、『体育の科学』1961年11月号、p.315
- 10) 佐々木賢太郎「現場は体育教育をこう考えている」、『新体育』、1960年3月号、pp.102-107
- 11) 佐々木賢太郎「和歌山の民間教育運動の体育実践に学ぶ」（講演記録）、学校体育研究同志会和歌山支部『佐々木賢太郎「ヒューマニズム」「人権」「民主主義」を求めた体育実践』、1995
- 12) 野田耕他「佐々木賢太郎の体育教育に関する研究：生涯について」、『東京体育学研究』1999年度報告、pp.59-64
- 13) 佐々木賢太郎、正木健雄「戦前・戦後の体育教育の実践」（対談）、日本体育・スポーツ教育大系刊行会『日本体育・スポーツ教育大系 第1巻 日本の教育の歩みと展望』、1994.7、pp.36-53
- 14) 『紀南教育7号』、1952年10月、p.12
- 15) 藤田五郎「読み書き能力調査の報告」、『教師の友』、1951年1月号、pp.23-26
- 16) 藤田五郎「和歌山県における民間教育運動史の試み－その2－」、『季刊 和歌山の教育』No.4、1974年1月号、pp.18-26
- 17) ふじた・かずよ「和歌山における教育サークルのあゆみ」、『作文と教育』、1959、pp.62-68
- 18) 『教師の友』、1950年12月創刊号の巻頭言、p.1
- 19) 藤田五郎「私的な和歌山県民間教育運動史の試み」、『季刊教育運動研究』No.4、1977年4月号、pp.105-142
- 20) 菅忠道「リアリストの目」、『明かるい学校』No.3、1947年6月号、p.2
- 21) 佐々木賢太郎「紀南作教の体育教師」、『紀南教育』96号、1972年11月、なお、この号にはページ数がない。
- 22) 佐々木栄子氏への聞き取り
- 23) 佐々木賢太郎（インタビュー）「憲法と命を守る体育実践の発表」、『スポーツのひろば』、1994年12月号、pp.13-17
- 24) 佐々木賢太郎「戦後体育の20年」、『体育の科学』1965年12月号、p.690-694
- 25) 中川州子『佐々木賢太郎氏の体育実践－その思想と生活綴方的教育方法の展開－』、宮城教育大学昭和57年度卒業論文
- 26) 佐々木賢太郎『『体育ノート』と『家庭訪問ノート』』、『作文と教育』、1955年3月号、pp.71-72
- 27) 藤田五郎、真鍋清兵衛、佐々木賢太郎「民間研究サークルのあゆみ」、国民教育研究所編集、『全書 国民教育 第7巻 地域における教育運動』所収、明治図書、1969年5月、pp.257-293
- 28) Manabe、『Taiiku』、1950年1月、3月、6月、（真鍋による体育のカリキュラム試案）
- 29) 峰地光重、今井誉次郎『作文教育』、東洋館出版、1957
- 30) 真鍋清兵衛、21)の上掲書所収
- 31) 『紀南教育』2号、1952年3月（『紀南教育』の1-3号は1枚ものの新聞の形式であり、冊子になったのは4号からである。）
- 32) ふじたかずよ「一年生の国語学習」、『教師の友』、1951年9月号、pp.16-18
- 33) 川合功一「紀南作教創立の頃」、21)の上掲書所収
- 34) 『紀南教育』1号、1951年10月
- 35) 藤田五郎他「座談会 戦後和歌山における教育運動」、『季刊教育運動研究』No.4、1977年4月号、pp.72-104
- 36) 石田和男他「座談会」、『季刊 教育研究運動』No.2、p.116
- 37) 『紀南教育3号』、1952年4月
- 38) 『紀南教育4号』、1952年6月
- 39) まなべ・せいべい『解放教育の基盤と内容－すこし理屈っぽい話－』、紀南教育16号特別付録、1954年1月、また、『部落』53、54号、1954年5月、6月号、他にも、部落問題研究所編「部落問題セミナー3 同和教育」、汐文社、1969年、pp.51-80、にも掲載。
- 40) 佐々木賢太郎、正木健雄「身体の危機に立ち向かう教育を求めて」（対談）、『教育』No.363、1978年10月号、pp.82-104
- 41) 野田耕他「佐々木賢太郎の体育教育に関する研究－教育実践の区分の試み－」、『上智大学体育』34号、2000、pp.9-17
- 42) 河原尚武「生活綴方的教育方法に基づく教育実践の思想－紀南作文教育研究会を中心として－」、『戦後部落問題の研究 第5巻 戦後同和教育の研究』、部落問題研究1979.11所収、pp.371-406
- 43) 国分一太郎、『日本の児童詩』、百合出版、1960、p.75